『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 14 (1984. 8. 1)
〈第9回全国英語教育学会自由研究発表〉

第2言語習得過程におけるproduction の役割
―― 第1言語習得過程との関連において ――

兵庫教育大学　山　岡　俊比古

1. はじめに

第2言語教育において現在よく唱えられている Comprehension Approach は，その理論的支柱の1つとして，第1言語習得の初期段階において comprehension が production に先行するという主張をあげる。この小論の目的はこの主張の不備を指摘し，よってこのアプローチを批判し，第2言語習得初期段階における production の役割を見直すことにある。

第1言語習得において comprehension が production に先行するという主張は，Asher (1972), Wintz and Reeds (1973), Postovsky (1974), Carry (1975)等によって確認されているが，この主張は，comprehension の能力は production の能力へ転移して行くという主張 (Asher 1972; 1977, Postovsky 1974; 1975; 1977) へ繋がる。さらにこの主張は comprehension の能力と production の能力は本質的に同一であるとする基本的見方に由来するものであり，これは，production の能力は comprehension の能力の部分的反映であるとするものである (Garry 1978, Postovsky 1975, Winitz 1981) 。以上の認識から Comprehension Approach においては次のような原則がうち出される (Asher 1977: 4) 。

Do not attempt to force speaking from students. As the students internalize a cognitive map of the target language through understanding what is heard, there will be a point of readiness to speak. The individual will spontaneously begin to produce utterances.

2. 用語の曖昧性

第1言語習得においてまだ話せない子ども，あるいは一語発話，二語発話の段階の子どもが自分に向けられるそれより長い大人の発話を理解できるということは誰にも否定できない。しかしここで理解という語の意味を吟味しなければならない。これには，発話の意味の理解と，発話を構成していることばの仕組み，つまり言語の理解という2つの意味がある。そして Comprehension Approachの場合は暗黙のうちながら後者の解釈を採っていることに注意すべきである。実際には，言語習得の初期段階において観察される comprehension は前者のタイプの理解なのである。つまり子どもは，耳にする文の中の主要な語彙項目をまずとり上げ，それに対応する指示物を決定し，そしてその指示物について既に持っている知識を駆使して発話の意味構造を決定するのであり，統語構造に注意が向けられるのはその後の段階である (Macnamara 1972: 7) 。より端的に言えば，「幼児は，意味を解く1つの鍵として言語を使うのではなく，むしろ言語を解く鍵として意味を使うのである。」(Macnamara 1972: 1) となる。意味の理解を可能にするものが，非言語的要素であり，子どもの非言語的要素への依存度の強さは Macnamara (1977)の実験でも明らかである。またこのことは，第1言語習得がいわゆる here and nowness の原則の中で行われており，それに由来する situational redundancy が豊富であることの反映とも言えるのである。

このような意味の違いを異った用語で表わすことをClark (1982: 14)は提案する。

Understanding ―概念の把握

Interpretation －発話の意味の理解

Decoding －文法指標に依存した interpretation

発話の意味の理解は，それを可能にする一般認知能力の発達に裏うちされた概念の把握が前提となるが，understanding はこのことを言うのである。さて，この用語の使い分けに従うと，Comprehension Approach は interpretation と decoding を全く同一視してしまっている点に誤りがあるのである。やや極端な比喩をひけば，牛に見える所へ干草を置き，「さあ来て食べろ」と言ったら，牛が近寄って草を食べた，ということから牛はことばを理解したと断定しているようなものである。意味の理解が先行し，それを基にした言語の理解が除々に進むと判断されると先に述べたが，この間に production が盛んに行われ，これが言語の理解を促進させている可能性が大きいのである。

3. 実験研究

de Villiers and de Villiers (1973b, 1974) は，19～37.5ケ月児で英語を母国語として習得している者を対象にし，MLU (Mean Length of Utterance) で設定される表出能力の各段階と逆転可能能動文 (reversible active sentences; e.g. 'Make the truck push the car.') と逆転可能受動文 (reversible passive sentences; e.g. 'Make the car be pushed by the truck.') の理解の相互関係を調べ，次のような結果を得た (de Villiers and de Villiers 1973b: 336)。

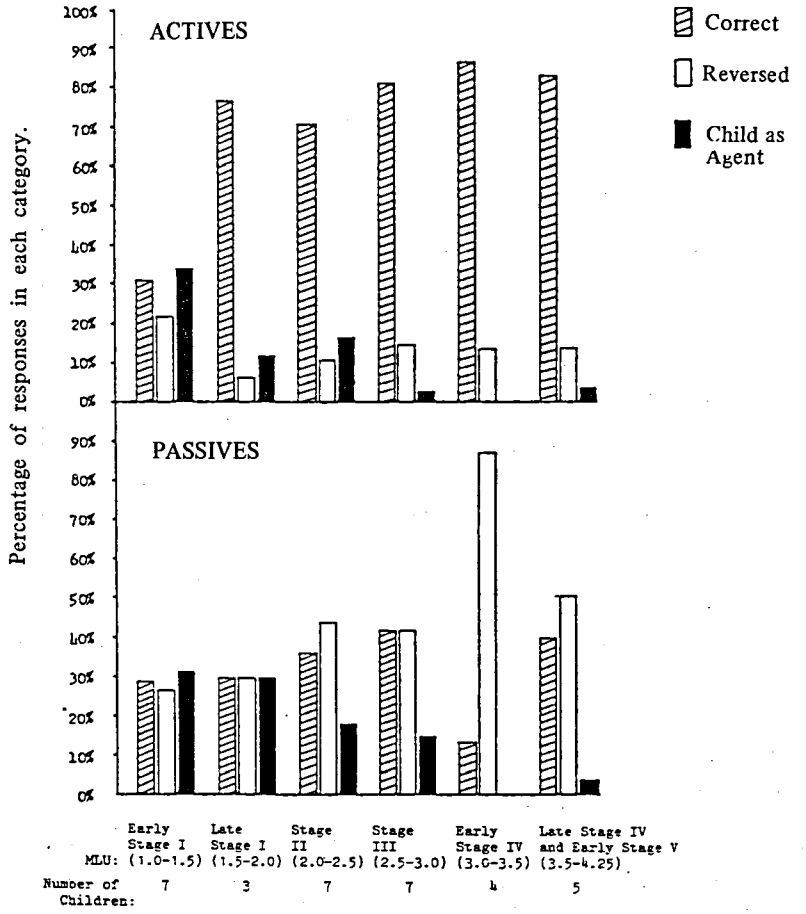

Fig. 1. Mean percentage of responses in each category for the children grouped according to MLU. Refusals are not shown in the figure but were included in calculating the percentages. The number of children in each MLU grouping is also shown.

まず能動文の理解において語順が利用されるのはLate Stage Iであることが分る。ここで注意しなければならないのは，その前の Early Stage I の段階は MLU からも判断できるように production においては発話の50％が1語以上の発話で，かつその語順が一定しているということである。この一見して見られる矛盾は，実験に使われた文が逆転可能文であるのに対し，Early Stage Iの発話のほとんどすべてが (+animate)+(−animate) という特徴を持っているということで解消できる。つまり，production の初期段階においては，文法的関係 (e.g. subject) や意味的関係 (e.g. agent) ではなく，非常に一般的な意味的特性 (e.g. ±animate)に基づいて発話がなされているのである。このことは，発話という行為は言語的な意味での理解を待つことなく行われ，むしろ，言語的理解は発話を通す中でもなされているとしなければならないことを示すものである。以上のことを de Villiers and de Villiers (1974: 16)は次のようにまとめている。

It is, therefore, very possible that in both production and comprehension a semantic heuristic precedes a grammatical rule; that syntactic roles (*sic*) are slowly differentiated from an initially semantic rule.

この実験結果とその解釈は，一語発話，二語発話に対して現在一般的に行われている解釈と一致するものである。初期においては McNeill (1970), Bloom (1970) のように，これらの発話を統語的知識の部分的反映として捕えることがなされたが，今ではこれを認知構造，ないしは概念構造の現われと把握することが行われ，文法構造はこの後に出現するとされるのである。例えば Bloom (1973: 20) は次のように述べている。

An alternative explanation for the emergence of syntax – and the one proposed here – is that children perceive and organize their experience of the world in the first two years in terms of certain conceptual representations that are not linguistic. Sometime during the second year, the child begins to discover aspects of the linguistic code that, in the language of his environment, can represent certain conceptions of experience. It is proposed that before the use of syntax in their speech, children have little if any knowledge of linguistic structure, and that children learn syntax as a mapping or coding of their underlying cognitive representations.

de Villiers and de Villiers の上の実験についてもう1つ注目しなければならないことは，規則の定着に関するものである。能動文の理解において Late Stage I で始まった語順の利用が，受動文の理解に過般化されて出現するのは Early Stage IV である。一般的にある規則が過般化されるということは，その規則の完全なる定着を意味するものである。とするとこの実験結果の意味するところは，ある規則の使い始めから，その規則の完全な定着までにはかなりの期間が必要であり，かつその間における過剰学習が必要となるということである。そして，この過剰学習が production という形でも行われていることは否定できないであろう。

この現象とよく似たものが，文法的形態素の習得順位を決定する研究 (Brown 1973, de Villiers and de Villiers 1973a) の中で確認されている。つまり，ある文法的形態素の最初の出現から，それが，義務的環境の中で90％以上の出現のレベルに至るまで1年以上かかるということである。この間 production においてこの形態素が練習されているのは言うを待たない。

以上のことをまとめると次のようになる。習得の初期段階において production は言語的な意味での理解に先立って行われ，この中から言語的理解，つまり規則が出現するのであり，しかもこの規則の定着にはかなりの期間を要するものであり，その定着化の過程は production につき添われているのである。

Chapman and Miller (1975) は MLU が 1.53〜3.11の子どもを対象にして，reversible active

sentences (e.g. 'The boy is hitting the girl.') とその reversed active sentences (e.g. 'The girl is hitting the boy.') を用いて comprehension と production の能力を測る実験を行い，反応のし易さは comprehension の方にあるが，反応の正確さは production において見られるという結果を得た。つまり comprehension においては，反応すること自体は多いが，正しい反応が多いとは言い難いのに対し，production においては，反応そのものは多くないが，そのほとんどが正しい反応なのである。これは主語と目的語の語順が comprehension における鍵として働くよりも，production においてより頻繁に守られている，ということを示しており，このことから彼らは，主語－目的語という構造の文法的習得は production が comprehension に先行すると結論する。そして comprehension と poduction のストラテジーは次のように異ったものであると述べる (368 － 369)。

comprehension strategies

(1) 文の中の名詞と動詞を脈絡の中の指示物と一致させる。

(2) 目にする出来事を基にしてその語彙項目の間の関係を推測する。

production strategies

(1) 言い表わすべき状況の中の目立った意味的要素を表わす語彙項目を確認する。

(2) 認知的把握を基にして語彙項目に対して配列的規則が適用される。

実験の結果から，この production のストラテジーが comprehension のストラテジーに利用されないということになるが，これを Chapman and Miller は Piaget の唱える preoperational stage にある子どもに特有な思考の非可逆性の現われであると指摘する。そして，この意味において concrete operational stage までは production と comprehension は必ずしも同じ言語能力を共有しているとは言えないとも述べるのである。

4. まとめと Comprehension Approach 批判

Ingram (1974) は， comprehension が production に先行するという常識的な見方を否定することが行われるようになり，"In fact, it is now fashionable to deny the previous assumption." (313) という傾向になっていることを踏まえた上で，改めて上述した常識的な前提の意味するところを次のように詳しく吟味し，それぞれに対し評価を加える。

I. All comprehension of language is complete before any production begins. (314)

この前提は，子どもが最初に語を発する時その言語についての知識はほとんど何もないという事実によって否定される。

Ia. All or much of comprehension of language may be complete before any production begins, and the converse situation is never found. (314)

この前提は，起りうる可能性をいうものであっても，通常の言語発達においては観察されない。

II. Complete comprehension of a specific grammatical form or construction is complete before it is produced. (315)

この前提は，子どもの初期の発話に多くのエラーが生じるということから否定される。

IIa. *Some* comprehension of a specific grammatical form or construction occurs before it is produced. (316)

この前提をIngramは支持する。ここでいう文法の理解とは構造的な知識のみならず，一般認知能力によって把握されるような意味関係の理解という初歩的なレベルまでをも含む。

IIb. Some perception of a specific grammatical form or construction occurs before it is produced. (324)

この前提は，perception がなされ，それが production にまわされる前には必ず多少とでも何らかの理解がなされているという事実によって否定される。

III. Some linguistic perception of a word occurs before it is produced. (331)

この前提は音韻的発達についてのみあてはまる。

以上の考察から Ingram は IIa の前提を支持する。つまり， comprehension は production に先行するという伝統的流れの中に自らを位置づけるのである。そして，この伝統的見方に対する批判は，伝統的立場が次のような主張をしていると誤解するところから生じるのであるとする。

(1) The gap between comprehension and production is systematically long and predictable.
(2) Complete comprehension precedes production.
(3) Comprehension involves auditory perception in all cases.

(329–330)

さて，筆者が上でとり上げたいくつかの実験研究はこの3つの主張に対して批判を向けたものであるという点に注意しなければならない。つまり，この意味において彼らは，IIa が意味的特性や意味的関係の理解をも意味すると判断できる限り， Ingram の「伝統的立場」と同じ立場に居ると言えるのである。 Ingram の主張にもかかわらず，上の3つの如き誤った主張を暗黙裏のうちに行っていたのは，むしろ伝統的立場の人々にあったと言うべきであろう。少くとも Ingram が行ったような厳密な分析がなされていなかったのは事実である。このような傾向は Comprehension Approach の唱導者において特に顕著である。以下にそれを示す。

Postovsky (1974: 229)

It is proposed that motor skill involved in production of speech output is an end result of complex and mostly covert processes which constitute linguistic competence.

Winitz and Reeds (1973: 296)

We would guess that comprehension antedates sentence generating by about a year. At the beginning of the third year of life children utter fairly simple sentences (...), but appear to understand a great number of transformations (...).

Asher (1977: 35)

When the child has internalized enough of the language code to be perceptually ready, speech will appear spontaneously.

Ingram は結論として，シンタックスの理解と表出の発達は当初考えられていたものより時間的に接近したもので，研究の結果 understanding と producing の近接性 (proximity) が明らかになったと述べている (331) が，これと上の Comprehension Approach の唱導者の記述と読み比べてみるとよい。

さて，このような第1言語習得の研究成果を知るに及んで Comprehension Approach の唱導者自身，例えば Winitz (1981: 106, 113) は次のように譲歩せざるをえなくなっている。

It is now believed that production does not wait until there is full comprehension.

Comparisons between comprehension and production are difficult indeed. Resolution awaits additional investigations.

以上の考察から，第1言語習得の初期段階において comprehension と production は異ったストラテジーでなされ，production は文法ないしは構造の理解に先立って行われること，そしてこれは言語の構造的仕組みを極めて根元的なところで支えているとも思えるところの，また一般的認

知能力の発達によりその把握が可能となる，意味的特性あるいは意味的関係を基にして行われることが明らかとなった。シンタックスの発生が comprehension を通して，つまり，自分に向けられた発話の非言語的理解を基にした投写的方法による構造分析によってなされることは当然であるが，production が構造的理解をほとんど待つことなく先駆的に行われるという事実からすれば，production がそのいわば実験的符号化の体験を通すなかでシンタックスの発達に，comprehension を通すのとは異った貢献をしていることは想像に難くない。少くとも，ここには Comprehension Approach で採られているような，comprehension を通してのシンタックスの成立を待って production がなされるといった一方的で序列的な関係は存在しないのである。このように見てくると冒頭で述べた Comprehension Approach の3つの前提，comprehension と production の発達順位づけ，前者から後者への転移，2つの能力の均質性が否定されることになる。Rivers (1981: 178–179) は Comprehension Approach を批判する中で，最も基本的な問題として，この転移についての何らの証明が無いということを指摘し，加えて，comprehension と production は単なる decoding-encoding といった鏡像的関係にあるのではなく，それぞれ異った文法に基づいて機能するという見方が最近の心理言語学研究の成果であると述べている。そうであるとするならば，production のための文法はまさに production を通して蓄積されると考えなければならないし，これまで検討してきた第1言語習得に現われる発話現象はまさにこれを表わしていると判断されるのである。

第1言語習得における production の役動をこのように見て来ると，第2言語習得においても同様の役割を production に求めるのが当然の帰結になるであろう。もっとも，第2言語習得の場合には，第1言語習得に見られるような非常に原始的なレベルからの production は期待すべくもないが，少くとも Comprehension Approach の提案に対して，その逆の，学習当初からの production の活動の重要性を強調することになるはずである。加えて，第1言語習得はいわゆる caretaker を従えた here and nowness の原則でなされており，実際のコミュニケーションを果す過程の中で行われるという事実を認める時，その中での production が要求され，歓迎され，容易に理解されるものであるが由にも，また，ことばというものを積極的に体験するためにも，子どもは production を行うのであると考えられる。端的に言えば，第1言語習得過程においては，意識的に何もしなくても，ほうっておいても production がなされるのである。しかし第2言語習得の場合にはこうは行かない。ほうっておいては production は出て来にくく，それ由になおさら production を促す方法が考え出されなければならない。勿論この production は Comprehension Approach が想定し，批判しているような無理じいをした production であってはならない。到達目標としての production の能力を習得するための性格付けを正しく与えられた production の活動でなければならない。概括的に言えば，それはある構造規則に則った符号化の過程を実際に経験するための production 行為という性格を持ったものになるであろう。

References

Asher, J.J. (1972), "Children's First Language as a Model for Second Language Learning," *MLJ*, 56, 3, 133–139.

——— (1977), *Learning Another Language Through Actions: The Complete Teacher's Guidebook*, Sky Oaks Productions.

Bloom, L. (1970), *Language Development: Form and Function in Emerging Grammars*, The MIT Press.

——— (1973), *One Word at a Time: The Use of Single Word Utterances before Syntax*, Mouton.

Brown, R. (1973), *A First Language: The Early Stages,* Harvard University Press.

Chapman, R.S. and Miller, J.F. (1975), "Word Order in Early Two and Three Word Utterances: Does Production Precede Comprehension?" *Journal of Speech and Hearing Research,* 18, 355–371.

Clark, R. (1982), "Theory and Method in Child-Language Research: Are We Assuming Too Much?" In S.A. Kuczaj II (ed.), (1982), *Language Development (Volume 1): Suntax and Semantics,* Lawrence Erlbaum Associations, 1–36.

de Villiers, J.G. and de Villiers, P.A. (1973a), "A Cross-Sectional Study of the Acquisition of Grammatical Morphemes," *Journal of Psycholinguistic Research,* 2, 3, 267–278.

——— (1973b), "Development of the Use of Word Order in Comprehension," *Journal of Psycholinguistic Research,* 2, 4, 331–341.

——— (1974), "Competence and Performance in Child Language: Are Children Really Competent to Judge?" *Journal of Child Language,* 1, 11–22.

Gary, J.O. (1975), "Delayed Oral Practice in Initial Second Language Learning," In M. Burt and H. Dulay (eds.) (1975), *New Directions in Second Language Teaching, Learning and Bilingual Education,* TESOL, 89–95.

——— (1978), "Why Speak If You don't Need to? The Case for a Listening Approach to Beginning Foreign Language Learning," In W.C. Ritchie (ed.), (1978), *Second Language Acquisition Research: Issues and Implications,* Academic Press, 185–199.

Ingram, D. (1974), "The Relationship between Comprehension and Production," In R.L. Schiefelbusch and L.L. Lloyed (eds.), (1974), *Language Perspectives - Acquisition, Retardation, and Intervention,* University Park Press, 313–334.

Macnamara, J. (1972), "Cognitive Basis of Language Learning in Infants," *Psychological Review,* 79, 1, 1–13.

——— (1977), "From Sign to Language," In J. Macnamara (ed.), (1977), *Language Learning and Thought,* Academic Press, 11–35.

McNeill, D, (1970), *The Acquisition of Language: The Study of Developmental Psycholinguistics,* Harper and Row.

Postovsky, V.A. (1974), "Effective of Delay in Oral Practice at the Beginning of Second Language Learning," *MLJ,* 58, 5–6, 229–239.

——— (1975), "On Paradoxies in Foreign Language Teaching," *MLJ,* 59, 1, 18–21.

——— (1977), "Why Not Start Speaking Later?" In M. Burt, H. Dulay, and M. Finocchiaro (eds.), (1977), *Viewpoints on English as a Second Language,* Regents.

Rivers, W.M. (1981), *Teaching Foreign-Language Skills,* Second Edition, The University of Chicago Press.

Wintz, H. (1981), "A Reconsideration of Comprehension and Production in Language Training," In H. Wintz (ed.), (1981), *The Comprehension Approach to Foreign Language Instruction,* Newbury House Publishers, 101–140.

Wintz, H. and Reeds, J.A. (1973), "Rapid Acquisition of a Foreign Language (Germany) by the Avoidance of Speaking," *IRAL,* 11, 4, 295–317.